とうべつ歴史余話

第39回 地域史の視点

旭川工業高等専門学校名誉教授 平野 友彦

北海道史のキーワードは「開拓」と「近代化」といわれる。明治以降、本州以南からの移民によって、「無主の地」とされた北海道の開拓が始まり、その後、資源供給地として日本近代化の原動力となったからで、それ故、明治を北海道の「開基」とする見方もあった。こうした見方を背景に開催されたのが、1968（昭和43）年の「明治百年」（10月）と「北海道百年」（9月）記念式典、2018（平成30）年の「明治150年」（10月）と「北海道150年」（8月）記念式典であった。

「明治百年」記念とは、近代国家たる日本の礎を築いた明治という時代を顕彰しようとするもので、「北海道百年」記念式典がその直前に開かれたのは、今日の北海道の発展が、明治以降の政府による近代化政策の成果であることを示すためであった。しかし、近年、明治以前も北海道には長くつながる人びとの歴史があったことが明らかにされ、明治を北海道の「開基」とする見方は当たらない。これまで北海道史は、政府や本州との関わりに注目して叙述されてきたが、近年は加えて、北海道地域に視点を置いた研究が進められている。この視点は、道内自治体史の叙述でも意識すべきものといえる。

「明治150年」に当たり、政府は各自治体に、明治期を振り返り、関連する多様な取り組みを行うよう求めた。当別町は、2020（令和2）年に「当別町150年記念事業」を企画し（コロナ禍で最終的に中止）、その一環として、仙台藩伊達家一門の兄弟領主（邦直（くになお）・邦成（くにしげ））が当別町と伊達市に入植したことから、同年10月に伊達市と「歴史兄弟都市盟約」を締結した。

「当別町150年」の起点は、仙台藩岩出山領主伊達邦直主従が当別に入植した1871（明治4）年で、これが当別町の始まりとされる。邦直主従が北海道開拓に従事した理由は、戊辰戦争後、敗者として処分を受けた仙台藩から「永の暇」を出されて困窮した家臣を救うためとされる。しかし、近年、重要国策と位置づけた北海道開拓に応じて成功することで、仙台藩の「朝敵」の汚名をそそぐこと、また、移住に批判的な本藩の直臣層に一矢報いることが動機であったとの指摘がある。とすれば、邦直主従にとっての第一義は北海道開拓を行うことで、その場所は当別である必要はなかったことになる。ここに、当別の歴史にとって、邦直主従の入植は重視すべきものの、より注目すべきは、彼らがなぜ当別を選んだかであろう。こうした捉え方が、地域に視点を置いた自治体史につながることになると思う。

なお、近年、吾妻家（邦直の家臣であり、当別移住に尽力した吾妻謙の一族）に保管されてきた「吾妻家文書」が当別町に寄贈され、その解読が進められている。当別の歴史に新しい光が当たることを期待したい。

（最終回）

得意の出小手で全国大会を目指して！

札幌新川高校剣道部

林 穂乃香さん

試合中の林さん

ここに書ききれないエピソードや写真は当別町ホームページ「現代を活きる＋（プラス）」でご覧ください。

今回は「第43回 北海道高等学校新人剣道大会」において、準優勝に輝いた札幌新川高校剣道部の林穂乃香さんにお話しを伺いました。

剣道一筋 11 年

剣道は、幼稚園の年中の頃、兄と一緒に練習の見学へ行き、楽しかったことから始めました。それからずっと剣道一筋で、今は三段です。兄と弟も剣道をやっていて、家で一緒に素振りをしたり、練習相手になってもらったりしています。

剣道の楽しさは、自分がこれまで出来なかった技を習得した瞬間や大会で自分の練習してきた通りに一本を取れたときに感じます。特に私の得意とする「出小手」が決まったときの喜びは何物にも代え難いです。反面、相手によって自分の剣道のスタイルと相性が合うかどうかが変わり、様々な戦い方を身に付けないといけないことは難しく感じます。例えば、相手の守り方が違えばフェイントのかけ方も変わるので、どうすると良いかを常に試行錯誤しています。

大会に向けて

私立高校と比べて練習に費やす時間は短くなりますが、練習の質を高めるようにし、本番でいきなり練習と違うことをしようとしても失敗してしまうので、練習と同じことをいつも通りできるよう意識しています。戦術としては、個人戦と団体戦で変えていて、4分間という限られた時間の中で勝負を決める必要がある団体戦では積極的に技を出し、個人戦はじっくり時間をかけてチャンスを窺います。もちろん、先ほど言ったようにその時の相手のスタイルに応じて戦術は変え、積極的に来るタイプなのか、応じ技が得意なタイプなのかを見極めてどういった技を出すか判断しています。

日常で意識する剣道の教え

武道は礼に始まり礼に終わるとされているので、挨拶はとても大事です。稽古の始まりと終わりに挨拶をし、先生からその日の練習についてのアドバイスを頂きます。学校生活でも、校内での先生への挨拶はもちろん、教えてもらった後にはお礼を欠かさないよう心掛けています。

また、武道には残心という概念があり、剣道においては自分が打突した後も相手の反撃に備えて気を抜かずに体制と気持ちを整えていないと無効になります。学校生活に当てはめると、テスト勉強で詰めが甘く対策ができていないと点数を落としてしまうので、この「最後まで気を抜かない」残心の意識が活きていると思います。

最後の高体連と剣道の未来へ

春に三年生になるので、今年が最後の高体連です。個人戦では優勝、団体戦ではベスト4を目標に、全国大会へ出場できるよう頑張ります。

また、幼い頃に剣道を始め、歳を重ねてもずっと続けている先生や先輩が周りにたくさんいます。しかし、剣道人口は徐々に減ってきていて、続けたくても剣道部がない学校も多いです。私も先生方と同じように大人になってからも剣道を続け、剣道人口が増えるよう、子どもたちの指導にも携わっていきたいと考えています。